ママお願い、切り取らないで！

k o d o m o z u r u m u k e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

　このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
ママお願い、切り取らないで！

【Ｎコード】
Ｎ０８５７Ｏ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
　「大学生のうちはセックス禁止」というのが恭子の母の方針だった。恭子も守るつもりではあったが、彼氏の要求を断りきれず早々に初体験を済ませてしまった。それが母にばれてひどく叱られた。次にやったらクリトリスを切り取るとまで脅された。
　しかし二人目の彼氏の優しさに触れ、恭子は自ら2回目を希望した。その後、１０月の生理が来なかった。これまで乱れることもなかったのに。もしかして妊娠してしまったの？

ついに母に感づかれてしまった。これから恐ろしい体罰が待っている。

女子大生恭子と母（前書き）

大学生のセックスなんて当たり前になってきた現代であるが、中には厳しく娘を管理しようとする母も存在する。娘を溺愛するあまり、しつけもエスカレートしてしまうことがあるのだ。２割の実話に８割の創作を加えた１８歳少女の悲劇を描きます。

女子大生恭子と母

秋も次第に深まりゆき、肌寒さを感じることが多くなってきた10月半ば、その日は雨が降って天気が悪く、昼下がりというのに暗かった。薄暗い和室、畳の上にひかれた古い毛布の上に足を乗せ、全身裸にされた恭子がうつむいていた。部屋の隅におかれた机の上におかれたお盆の中にはピンセット・カッターナイフ・ガーゼ・消毒液・カミソリ・ハサミがセットされておかれていた。隣には恭子が中学生時代から大事に集めていたマンガすべてがダンボールの中に入れられ、無造作におかれていた。恐怖に震える恭子の目にはうっすらと光る涙があった。土曜日ではあるが父親は仕事に出ていた。半日で仕事を終えてもうすぐ帰宅する予定である。母は父が帰宅するのを待ってお仕置きを開始するつもりだった。

セットされた道具は恭子のクリトリスを切り取るためのものである。警告を与えたのにもかかわらず、同じ過ちを繰り返した恭子に母は激高し、警告通りクリトリスを切り取ると言い放ったのは前夜のことである。マンガは母が没収した。母は恭子にお仕置きをする時、大切にしているものを奪う、という方法を用いた。小学生時代、ゲームを買ってほしいとねだった恭子に対し、勉強が優先という理由でゲーム機を買い与えなかった。中学入学祝いにようやく買ってもらったプレステもちょっと成績が低下するとすぐに取り上げた。クラス40数人中、はじめて1桁台に入れなかった中2の2学期中間試験の結果を見た母は日曜大工の道具箱からトンカチを持ち出してきてプレステを何度も叩いた。泣いて許しを乞う恭子の願いを聞き入れず、ソフトも次々とトンカチで叩き割った。それ以降、ゲームは一切手にすることができないようになってしまった。大学生になってようやく購入許可が出て大いに楽しんだ。しかし9月上旬に

発表された大学の成績表を見た母がは即座に没収した。Ａが少なくＣやＤもある成績表を見た母は恭子のＤＳを取り上げ、目の前で真っ二つに折った。そしてプレステとＷｉｉの本体・ソフトを恭子の不在時に没収してダンボールにつめ、トランクルームに預けてしまった。来年３月に出る後期の成績をみて返却するか処分するか決めると言い放った。ゲーム類が一切ない今、恭子の楽しみは中学生時代から少しずつためてきたマンガである。中学生と高校生の時、何度が一部を処分されたが、それでも買い足すなどして大事にためていた。今回、それも全て奪われた。しかし今、その悲しみにひたることさえ出来ない状況に恭子は置かれていた。自分の体の中でも一番敏感で神経が集中しているクリトリスを切り取られるかもしれないのだ。

恭子は小柄で可憐な少女である。高校時代もかわいいと評判ではあったが、規律の厳しい女子校だったので浮いた話は一つもなかった。６年間通った女子校を卒業し、本当は共学の大学で花の学生ライフをというのが恭子の願望だった。しかし母はそれを許さず、すべて女子大学を受験させた。キャンパス内には職員以外の男性がいないという環境にまたもや放り込まれたのだ。学生時代は勉学第一、というのが母の考えである。したがってサークル活動は認めなかった。しかし塾講師のアルバイトだけは許可を出した。母は恭子を教育の道に進ませたいと考えており、恭子自身も同じ志望を持っていた。教育の道を志すのであれば塾講師のアルバイトは良い経験になるという判断だった。ここでようやく同世代の男性と触れ合う機会を得た。男性経験のない恭子は、男性講師から見れば格好の相手であった。塾講師をはじめて程なく声をかけてきた男性講師がいた。甘いマスクで高校時代からプレイボーイと称された、１つ年上の浩太である。浩太の告白に、恭子は心底喜んでうなづいた。後で見つかるとやっかいなことになると思った恭子は帰宅後、母に報告した。しつけには厳しい母であるが、普段はとてもやさしく、一人娘の恭

子を心から愛している。その愛情ゆえ、時には厳しい体罰も辞さないのである。恭子もそれはわかっていた。だから怖い存在ではあるが母のことは好きだった。報告を受けた母は悩みながらも「勉学の妨げにならないよう程ほどにすること」「公共の目があるところではしたない行動をしないこと」「お泊りは絶対に禁止」「大学生時代はセックスは絶対禁止」「決して互いに裸にならないこと」などの厳しい条件をつけた上で恋愛を許可した。恭子も最初は守るつもりでいた。そんな難しいことではないと思ったし、何より恋愛をしたかったのだ。しかし女性経験が豊富な浩太にとって初々しい恭子を自分の世界に引っ張り込むことは簡単な話であったのだ。次第に浩太が作った罠にはまっていくことになる。

浩太との熱愛、悲劇序章（前書き）

初々しい恭子は目の前にあらわれた初めての異性、浩太と深い恋に落ちていき、母の言いつけなど破ってしまった。

浩太との熱愛、悲劇序章

学業もそれなりに頑張るつもりだった恭子だが、浩太との日々はとても楽しかった。これが恋なのだと実感していた。つい大学をさぼることも増え、前期成績は悲惨なものであった。それを見た母は怒り恭子が大事にしていたＤＳを目の前で真っ二つに折り、レステとＷｉｉを取り上げた。それだけで収まらない母は、恋愛に溺れていることが成績不振の理由ではないかと厳しく詰問した。

実はその時、浩太とは既に別れていた。8月末の夏期講習中、恭子は処女を失った。母からセックスはもちろん、服を脱いで裸になることも禁じられていた。性的行為とは本来生殖のためのものであり、互いの裸を見たり触れたりなどは少なくとも1年以上つきあいをした上でなければ認められないと母は考えていた。恭子の自宅に挨拶へきた浩太に対しても母は直接忠告した。そこでは素直にうなずいた二人であるが、浩太の家に内緒で遊びにいくようになってから服を脱ぐまで、時間はかからなかった。やさしく服を脱がせていく浩太に対し、恭子は何も抵抗しなかった。いけないことをしているとは思ったが、それより快楽が勝っていたのだ。自分だってもう大学生、このくらいのことはいいじゃないかと思っていたのだ。浩太は女性経験が豊富である。自慰行為すらしたことない恭子の性器をやさしく愛撫し、性感をマックスに持っていった。その快感が忘れられず、週に何回も浩太の家に行っては服を脱ぎ、愛撫してもらった。そして遂に8月下旬、浩太が自分の性器を恭子の膣に入れようとした。さすがにそれは抵抗したが、避妊するから心配ない、といわれて受け入れてしまった。大人になった気がした。

しかしその後、浩太の態度が急変した。元々浩太は体目当ての恋

愛をするプレイボーイ。セックスまで行けば標的は次の処女へと移る。最初はやさしく相手の親にも礼儀正しいが、それは全てパフォーマンスなのである。恭子は同僚の女性講師から、浩太が浮気している噂を聞いた。そして動かぬ証拠を見つけてしまったとき、恭子の心も急に離れていった。そして夏から同僚になった同い年の純也に次第にひかれていった。９月に入ってすぐ浩太とは別れ、純也と新しい恋愛をはじめた。別れてすぐの恋愛に母が不快感を示すことは想像できた。だからしばらく別れたことも、純也とのことも黙っていようと考えたのだ。

事情を知らない母は熱愛が成績不振の原因だと確信したように恭子を責めた。肩をつかみ、「まさか裸になったりしてないしてないでしょうね？どうなの？ママの目を見て正直に答えなさい！」と攻める母に嘘を突き通すことは出来ず、恭子は遂に白状した。セックスまで行ってしまったこと、浮気をされて今はもう別れたことを正直に話した。母は思い切り恭子の頬を平手で叩いた。泣き出した娘にかまわず、次々ビンタを加える。そしてお仕置きをするといって恭子を居間へと連れ出した。

母のお仕置き（前書き）

浩太とセックスをしたことが母にばれてしまった。これからお仕置きである。

母は恭子をひきずるように居間へ連れてきた。そして恭子にスカートとパンツを脱ぐように命じた。まさかの展開に恭子は必死で抵抗した。「やだぁ、ごめんなさぁい」しかし母は恐ろしいほどに冷静であった。「男の前では簡単に脱ぐんだからママの前では何の抵抗もないはずでしょ！」と強く言った。そして恭子のスカートを引き裂くかのような力で引っ張ったのだ。ここまで来て遂に恭子は観念した。これ以上抵抗しても余計お仕置きが厳しくなるだけだと。

下半身裸になった恭子を母は仰向けに寝かせ、股を大きく開かせた。しっかりと発育した外性器全てが母に見えていた。中学生の時、うつぶせでパンツを膝まで下ろされ、尻を何回も叩かれたことはあるが、裸で仰向けというのは物心ついたときから初めてだった。いくら同性の母とは言え、まだ思春期の恭子にはとてつもなく恥ずかしかった。

恭子は比較的毛深い。母は和バサミを持ってくると、外性器に近い部分の毛を慎重に切り落とした。恭子は目に涙を浮かべ、「やめてぇ」と叫んだが、母は容赦せず黙々と作業を続けた。毛を切られて、恭子の性器はよりハッキリと母の目に入った。次の瞬間、母は恭子のクリトリスを左手の親指と人指し指でしっかりつまみ、強く引っ張った。恭子のクリトリスは平均的な女性より大きめだった。そこで母はピンセットを持ってきた。左手で皮をめくり、右手に持ったピンセットで恭子のクリトリスを掴んで容赦なく引っ張った。激痛だ、恭子に出来ることは「ママごめんなさい、もう二度と約束破りません」と泣き叫ぶことだけだった。そんな恭子を起こし、母はパソコンである動画を見せた。それはアフリカあたりで行われて

いる性器切除のもので、小さな女の子が性器を切られていく様子が写っていた。動画を見て震える恭子に対し、母は言い放った。

「今度こんなことをしたらママはあなたのクリトリスを切るからね。覚悟しておきなさいよ。今回だけは許してあげる」

まさか出来ちゃった？（前書き）

8月末に浩太と別れ、9月早々に純也と新しい恋をスタートさせた。その直後、家に送られてきた前期成績表を見た母は激怒した。熱愛が成績不振の原因と決め付けて責める母に、恭子は浩太との別れを報告した。母の大きな目で見つめられ、遂にセックスをしてしまったことも打ち明ける。パンツを脱がされ陰毛を切り取られ、クリトリスを引っ張られるというお仕置きをされ、恭子はずっと泣き続けた。

まさか出来ちゃった？

敏感なクリトリスをピンセットで引っ張られたのはとても痛かった。その痛みと母の凄まじい形相にお仕置きが終わっても恭子はまだ震えていた。パンツをはいて自室に戻った後も涙がとまらずにいた。これからは勉強も頑張らねば、と覚悟を決めたのだった。

純也は同い年であるがちょっと大人びていて格好良かった。前々から恭子ちゃんを好きだったけど、熱愛していたからずっと秘めていたんだ、といわれ、恭子はとても嬉しかった。浩太にひどい捨てられ方をしただけに純也の優しさは心にしみていた。

大学が再開すると恭子は熱心に勉強した。予習・復習を欠かさずに夜まで勉強している恭子の姿に、母は優しいまなざしを向けた。元々は恭子にとても優しい母である。機嫌が良いのを見計らい、恭子は純也との恋を母に報告した。今度は大丈夫、セックスは絶対しないし脱ぐこともしない、キスも当分はしないからといった。そして互いに励ましあって勉強していることを伝えると、母も反対しなかった。純也も将来は弁護士を目指して1年目からダブルスクールに通うまじめな学生である。それを聞いて母も今度は大丈夫だろう、良い刺激になればと思ったのだ。

互いの家へ行き、二人で勉強することもあった。挨拶もしっかりした純也に母も好感を抱いていた。前のことがあるから服は脱ぎたくないという恭子の思いを尊重し、純也はいつも服の上から恭子の胸をやさしく揉んだ。最初は洋服の上から、次第に下着の上から、そして下着の中に手を入れて・・・段階をふんで揉んでもらうよう

になった。純也の手が大変気持ちよく、恭子の方からやって欲しいと願っていたのだ。そのうち、短パンの上からクリトリスも触ってもらうようになった。とても気持ちがよく、次はパンツの上から、そしてパンツの中に手を入れて・・・と変わっていった。純也にクリトリスや胸を優しく揉んでもらうと恭子はいやなことがあってもすぐに忘れることが出来たし、夜もぐっすり眠ることが出来た。

恭子にとって、浩太と行った最初のセックスは嫌な思い出しかなかった。無理やり入れられたというのが正直なところである。そのイメージをぬぐいたかった。しかし今度セックスをしたら母がどんなに怒るかは想像ができた。さすがにクリトリスを切るというのは脅しだと思っていたが、またクリトリスを激しく引っ張られるかもしれないし取り上げられているゲーム機も壊されてしまうかもしれないなと思った。でも純也の魅力は恋しかった。思い切って恭子は、純也に相談してみることにした。純也は、「もう大学生なんだから、絶対見つからないようにやれば大丈夫だよ。一回だけやろう」と明るく返答した。恭子はそれもそうだと思った。詰問されなければ喋る必要もないし勉強を頑張ればよいのだ、と割り切ることにした。絶対見つからないために自宅を避け、出来るだけ遠い町のラブホテルを選んだ。付き合い始めて1ヶ月弱、初めて互いの裸を見せ合った。

裸になって全身を揉んでもらうのは格別だった。気分も高まってきたところで、純也はホテルにあるコンドームをつけ、恭子の膣に優しく挿入した。とても気分の良いものだった。小休止を挟みながら、2回・3回と繰り返した。帰り道、これならまた来たいなと恭子は思っていた。自宅や大学の周辺を避けるので遠いところまで移動しなければならない。時間とお金のやりくりは大変だが、数ヶ月に1回くらいは、と心に決めたのだった。ところが10月に入り、

恭子の体に異変が起こった。リズムが崩れることなく来ていた生理がなかった。しかも多少のだるさを感じていた。もしかして、もしかして・・・仲のよい友達に相談してみると、ホテルにおいてあるコンドームは薄かったり破れているものもあるということ・・・そして射精の直前につけたのでは妊娠の可能性があるということ・・・恭子はとてつもない不安を覚えた。もしかして出来ちゃった・・・・・？

妊娠確認（前書き）

まさか・・・まさか・・・生理が来ない・・・しっかり避妊したはずなのに・・・

妊娠確認

浩太と初めてのセックスをしたのが8月の下旬、しかし9月に入って早々に予定通りの生理が来た。恭子は小5の終わりに初潮を迎えた。それ以来、生理が来ると毎回母に報告していた。生理が来ている間は母も下着を脱がしてのお仕置きはせず、お尻やお腹付近を打つことはしない。恭子の家では父親の帰宅が遅いこともあり一番風呂に恭子が入ることが許されていたが、生理の時は最後と決まっていた。だるいと訴えれば無理に勉強させられることもなく、家事手伝いを免除された。そういった事情もあり毎回報告していたのだった。

中学生になると周期が安定した。たまに乱れることもあったが、ほぼ27日くらいで決まっていた。どんなに遅くても30日以内だった。ところが今回、30日を過ぎても一向に兆候がなかった。こんなことは初めてだった。そこで仲が良い友人に相談した。それまで恭子はコンドームさえつければ完全に避妊できると信じていた。しかしコンドームも完全ではないこと、特にラブホテルのものは薄かったり破れていることがあると知った。体のだるさもあり、恭子は不安な時間を過ごしていた。

恭子の生理日を毎月確認している母は、今月の生理が遅いことに気づき始めていた。30日目までは遅れているだけだと気にしていなかったが、いよいよ35日になりさすがに異変を感じ、恭子に真実を確かめた。まだ来ていない、遅れているとだけ返答する恭子の目にうっすらと光る涙があることに母は気づいた。母は出来るだけ優しい態度で恭子に話しかけた。1ヶ月前に厳しいお仕置きを恭子にした母は、当分はセックスをしないだろうと信じていた。しかし

万一の時はちょっと対応が遅れたことが事態を急変させてしまう。だからこそ、娘とじっくり向き合っているのだ。その時、母は恭子のカバンからあるものを見つけた。それは恭子が前日に買ってきた妊娠検査薬だった。まだ使用していない状態ではあったが、なぜカバンの中に入っているのか、母はすぐに察知した。とてつもないショックを受けた母ではあるが平静を装い、まずは使用してみるよう促した。結果は陰性であった。その後で母は恭子を、産婦人科に連れて行った。妊娠の有無を調べてみるためであった。結果は陰性、医師によれば季節変化と環境変化、体調不良などでリズムが狂ったのでしょう、あと1週間は様子を見て下さい、という診断であった。ひとまず妊娠の可能性は低いとわかり、母娘共々心の底から安心した。

恭子にとって最大の難関は乗り越えた。しかし、それに匹敵するほど恐ろしいことがこれから待っていたのだ。病院から帰ると母は恭子を居間に座らせた。なぜこのようなことになったのか、一部始終を詳しく説明させた。そして3つのことを言い渡した。

1つ目は純也とすぐにわかれ、今後大学を卒業するまで一切の恋愛を禁止するということ。

2つ目は部屋にあるマンガ本全てを今夜中に段ボール箱の中につめておくこと。

1つ目は恭子も致し方ないと思った。自分のうかつさを責めた。今度こそ恋愛なんてしないと決心した。純也のことは好きだし純也に何の罪もない。でも付き合っていれば自ずと求めてしまうからきっ

ぱり別れよう、勤務先の塾も変えようと決めた。２つ目は正直びっくりだった。捨てられてしまうのか、ある程度したら返してくれるのか、それが不安だった。しかし逆らって隠したりすればただではすまないことは理解していたので、夜のうちに大切にためたマンガを集めることにした。

そして３つ目が恭子を真っ青にさせた。

「明日は土曜日だからパパも午後には帰ってくるね。そうしたら約束通り、クリトリスを切りましょう。明日の午前中に道具は揃えておくからね」

股間に強烈な痛みが走ってきた。そして次の瞬間、近所に響き渡るような大きな声で泣き叫んで許しを願った。「ママお願い、そんなこと言わないで。切るのだけは勘弁して！」「切るのは嫌だ～」

一度部屋を出て行った母が戻ってきた。そして無言のまま、恭子の頬に平手を見舞った。「近所迷惑でしょ、静かにしなさい。先月言ったわよね！」

恭子は薄暗い部屋で、一人しくしく泣き続けた。

クリトリス切除の準備

翌日は朝から雨が降っていた。なんとも言えないどんよりとした気候であったが、母は朝から忙しく動いていた。土曜日であるが父は半日だけ仕事がある。昼過ぎに父が帰宅したらいよいよ恭子に対する厳しいお仕置きが始まる。母が忙しく動いているのは恭子のクリトリスを切り取る準備のためである。

目をさました恭子は、昨夜のうちに集めておいたマンガを集めて居間にもって行き、机の上に無造作におかれたダンボールの中へと入れた。中学生の時から、母に怒られながらも集めてきた大切な宝物である。成績が悪かった時などに破かれてしまったものも何冊かはあるが、それでも小遣いをためて購入したマンガは５０冊以上あった。昨夜、母から没収を言い渡され、仕方なく集めたものである。何冊か隠しておこうとも思ったが、学校に行っている間に部屋をくまなく探されたら見つかってしまい、そうなれば更なる厳罰が待っている。ある程度たったら返してくれることを願いつつ、恭子はマンガを全てダンボールの中に入れた。

買い物から帰ってきた母は揃えた道具を机の上に並べ始めた。お盆の上にはカッターナイフや新品のハサミ、ピンセットや消毒液などが並んだ。それを見た恭子は股間に強烈な痛みを覚え、青ざめた。母は至って冷静である。台所に行くとトースト・サラダ・スープといった食事を並べた。クリトリス切除が終わるまで昼食をとることは出来ない、嘔吐の危険を避けるためである。それゆえ今日は朝食と昼食を兼ねて昼前にとっているのである。

昼食後、母は恭子にシャワーを浴びてくるよう命じた。シャワー

を浴びて髪を乾かすのが終わると、居間に来てそのまま全裸でいるよう告げた。畳張りの居間全体に古い毛布が敷き詰めてあった。これはクリトリスを切るときに大量の出血が予想されるからである。いよいよお仕置きの時間が近づいてきている。恭子は目に涙をため、すがるような表情で母を見上げた。母は恐ろしい程に無表情である。声を絞り出すように、「ママ本当にお願い、切るのだけは勘弁して！他はどんな罰も受けるから、お願い」と哀願した。母はそれに答えることなく、「仰向けに寝なさい」とだけ言い放った。

恭子が全裸のまま仰向けになると、母はまず恭子の両手を胸の前に組ませて紐でくくった。切除する時に暴れると危険だからである。そして股を思い切り広げ、両足をそれぞれ足つきの棚にくくりつけてしまった。これで恭子は暴れても逃げ出すことが出来ない。母が脅しだけでやってるわけでないことは恭子にもわかった。続いて母はガーゼを取り出すと、消毒液をたっぷりしみ込ませた。そして下腹部と外性器をぬぐった。まず下腹部に生えそろっていた陰毛をハサミで切り、剃刀をかけて全て除去した。外性器の周りは母が一ヶ月前に大分切り落としたので陰毛の数は少ない。それでも小型のハサミを器用に使いこなし、綺麗にそり落とした。毛痕はあるものの、まるで小学生のように無毛な状態だった。

ちょうどその時、父が部屋に入ってきた。父親と風呂に入ったのは小学校低学年以来、もう１０年は前のことである。物心ついてから父に性器を見せたことはない。いくら家族とは言え、まだ思春期半ばの恭子にとって、毛が生えてない外性器を異性である父にさらすことはとてつもなく恥ずかしかった。浩太と純也以外には見せたことのない外性器を、父がまじまじと見ている。恐怖と恥ずかしさで恭子は顔を真っ赤にし、涙をポロポロとこぼした。いよいよ儀式が始まるのである。

ママお願い、切り取らないで！

母は再びガーゼを手に取り、消毒液をしみ込ませた。下腹部と外性器を満遍なく拭いた。毛を剃った直後ということもあってかなり沁みたので恭子はうめき声をあげた。特にクリトリス包皮を剥いて中を拭かれた時には上半身が飛び上がるほどの痛みであった。下腹部から肛門付近まで、毛は全て除去され念入りに消毒された。これで準備は全て整った。

父は仕事カバンのほかに紙袋をひとつ持っていた。その中には恭子の宝物、プレステ2とそのソフトが入っていた。1ヶ月ほど前に母が没収してトランクルームに預けたゲーム機2つのうちの1つであり父が仕事帰りに持ってきたのである。恭子は嫌な予感がした。その予感はすぐに的中した。トンカチを右手に持った母は恭子の目の前でプレステ2の本体を叩き壊した。修復できないようにあらゆる角度で執拗に叩いた。そしてソフトを一枚一枚取り出し、真ん中から折り曲げた。それを更にトンカチで叩き割ってしまった。上半身を起こした恭子はやめて～と哀願することしかできなかった。恭子にとって、一番の宝物ともいえるプレステ2本体とソフト十数枚を無残な姿にされてしまった。

父が突然恭子の広げられた足の間に座ると太い指でクリトリスを皮の上から強くつまんだ。「お前、一歩間違えれば妊娠してたんだぞ。そんなことになったらお前やパパたちが築き上げてきたものは一気に崩れるんだ。お前はまだ事の重大さがわかってない」と強く言い放った。そして反対側に回り、恭子の上半身を強く押さえつけた。

代わって母が足の間に座った。「クリトリスを切ろうと思ったんだけど・・・」という言葉に恭子は一瞬期待した。勘弁してもらえると思ったのだ。しかし母の言葉の続きを聞いて、余計に青ざめることとなる。「それだけじゃ他にも感じてしまう部分があるから、昨日パパと相談して外に出ている部分は全部切ることにしたから」なんとクリトリスだけではなく小陰唇や大陰唇まで切られてしまうのだ。

「さあ、はじめましょう」という掛け声と共に母は恭子のクリトリス包皮を剥いた。左手で押し上げクリトリス本体を出来るだけ露出させた。そして右手に細長いピンセットを持つとしっかりと挟んだ。この時点でかなりの激痛だ。それを左手に持ちかえると思い切り引っ張った。「痛い痛い！やめて！」と叫ぶ恭子の口を父がふさいだ。母はカッターナイフを右手に持つと、恭子に見えるよう目の前で刃を出した。そしてそれをクリトリスにあてがった。恭子は益々激しく泣き叫んだ。そして「ママ、本当にごめんなさい。パパ、本当にごめんなさい。もうしませんから今回だけは許して下さい！ママ、お願いだから切り取らないで！残しておいて！」

その時間が数秒続いた。無論、恭子にはとても長い時間に感じられた。ふいに母はクリトリスを強く引っ張っていた左手を離した。クリトリス本体の大部分は皮の中へ再び収まった。父が一旦恭子の背中を起こした。母は恭子の顔をじっくり見つめ、「本当に心から反省している？」と問うた。恭子は勿論というように何回もうなずいた。母は父と顔を見合わせると、片隅にあった机を引き寄せた。そして、「本当に悪かったと思っているなら居間からその気持ちを反省文として書きなさい。その内容をパパと相談して、切るかどうか、どこまで切るかを最終的に決めます。１５分後にまた来るわ」といって部屋を出た。紐を父にほどいてもらい、用意された原稿用

紙に思いを書き綴った。涙と鼻水でぐしょぐしょになった原稿用紙に必死の思いで反省の思いをこめた。

１５分後、両親が入ってきた。母は恭子に、再び仰向けになって両足を大きく広げ高くあげることを命じた。大きく広げた股の間で母は反省文を読んだ。そしてそれを上半身を押さえつけている父へと手渡した。父は読み終わると母へ目配せした。いよいよ結論が出たのだ。クリトリスをつまみながら母は恭子に言った。「大分反省したみたいだから、今回、切ることだけは勘弁してあげる。ここまですれば同じ過ちは繰り返さないでしょうからね」

こうして恭子は何とかクリトリス切除を免れることが出来た。最後に父がもう一度クリトリスを強くピンセットで引っ張り、その後消毒した。クリトリスはあまりにも強い刺激を受けて相当痛んでいた。父は先程とは幾分違う優しい手つきでクリトリスに切り傷の薬を塗った。その頃、母は没収したマンガの入った段ボール箱を中庭へと運んだ。ようやく服を着ることが許され、痛い股間を押さえながら庭をへとやってきた恭子の前で、母は丸めた新聞紙に火をつけて段ボールの中へと放り込んだ。少しずつ、恭子の宝物が灰に変わっていった。それを見ながら親子三人、何ともいえない気分で遅めの昼食をとることになった。

ママお願い、切り取らないで！（後書き）

恭子ちゃんはこの後、恋愛することもなく学業に励み、優秀な成績で大学を卒業した。そして都内でも有数の名門私立中学に教師として赴任、そこで2年目に同僚の教師と無事結婚した。セックスをしたのは結婚式の夜が最初だった。そして翌年の秋、第一子を出産して優しい母となった。

2割の実話に8割の創作を加え（実際は1：9かも）物語風に、出来るだけ生々しく描きました。卒業まで駄目、結婚まで駄目とは言いませんが、簡単にセックスへ走ってしまいがちな現代の若者が、少しでもセックスや妊娠の意味を考えてくれたら嬉しく思うのですが。

恭子の恐怖、痛みが伝わりましたでしょうか？また機会があれば女性器切除の話も書いてみようと思います。長文にお付き合いありがとうございました。